

こういうわけで、今は、キリスト・イエスにある者が罪に定められることは決してありません。なぜなら、キリスト・イエスにある、いのちの御霊の原理が、罪と死の原理から、あなたを解放したからです。肉によって無力になったため、律法にはできなくなっていることを、神はしてくださいました。神はご自分の御子を、罪のために、罪深い肉と同じような形でお遣わしになり、肉において罪を処罰されたのです。それは、肉に従って歩まず、御霊に従って歩む私たちの中に、律法の要求が全うされるためなのです。肉に従う者は肉的なことをもっぱら考えますが、御霊に従う者は御霊に属することをひたすら考えます。肉の思いは死であり、御霊による思いは、いのちと平安です。というのは、肉の思いは神に対して反抗するものだからです。それは神の律法に服従しません。いや、服従できないのです。肉にある者は神を喜ばせることができません。けれども、もし神の御霊があなたがたのうちに住んでおられるなら、あなたがたは肉の中にはなく、御霊の中にいるのです。キリストの御霊を持たない人は、キリストのものではありません。もしキリストがあなたがたのうちに住んでおられるなら、からだは罪のゆえに死んでいても、霊が、義のゆえに生きています。もしイエスを死者の中からよみがえらせた方の御霊が、あなたがたのうちに住んでおられるなら、キリスト・イエスを死者の中からよみがえらせた方は、あなたがたのうちに住んでおられる御霊によって、あなたがたの死ぬべきからだをも生かしてくださるのです。ですから、兄弟たち。私たちは、肉に従って歩む責任を、肉に対して負ってはいません。もし肉に従って生きるなら、あなたがたは死ぬのです。しかし、もし御霊によって、からだの行ないを殺すなら、あなたがたは生きるのです。神の御霊に導かれる人は、だれでも神の子どもです。あなたがたは、人を再び恐怖に陥れるような、奴隷の霊を受けたのではなく、子としてくださる御霊を受けたのです。私たちは御霊によって、「アバ、父。」と呼びます。私たちが神の子どもであることは、御霊ご自身が、私たちの霊とともに、あかししてくださいます。

1 いのちの御霊の原理で生きる

1節 とういうわけで、今は、キリスト・イエスにある者が罪に定められることは決してありません。

キリスト・イエスにある者はさばかれる事はない。有罪判決を受ける事はない。のろいから解放されているということです。試練もあり、試みもあり、懲らしめもあります。しかし罪に定められることは決してありません。

2節 「いのちの御霊の原理」「罪と死の原理」と書いてあります。

東京タワーに登って、ハンカチを投げるなら、それは風によってひらひらと地上に到達するであろうと思います。私がアメリカに渡った時、「アメリカではすべての事が反対だよ」と言われました。地球の裏側にアメリカがある。確かに反対だと思い、エンパイヤステートビルディングに登りました。そこでハンカチを投げると、日本とアメリカではすべてが反対ですから、どんどんと上空に向かって昇って行くのかと思いましたが、そうではないことを皆さんは知っています。

韓国においても、東京タワーのようなタワーがソウル市にあり、そこでハンカチを投げても同じです。パリにおいても、恐らくハンカチは下に降りて行くであろうと想像します。

なぜかという、万有引力という法則、原理が働いていて、重力のあるものを地球が引っ張るのです。法則ですから、100回やれば、100回同じ結果が出てきます。地球のどこに行っても同様に起こる。それは法則である。例外はない。

ところが引力を受けない生き物もいます。たとえば鳥は、あんな小さなからだが、あつという間に空に飛び立ち、あつという間にはるかかなたに飛んでいきますね。町田にいる時に鶴見川があって、空飛ぶダイヤモンドと呼ばれ、鳥の中では最も美しいカワセミを見つけました。川がだんだんきれいになったので、カワセミが帰ってきているのです。時々、朝散歩に行くとカワセミを見に行きましたが、たまに姿を現してくれます。あんな小さい小鳥ですが、彼らには引力が働いていないということでしょうね。

アメリカでは duck hunting、鴨を撃ちに行く人がいます。彼らは地上を歩いている鴨は撃ちません。猟犬を放つと猟犬がワンワン吠える。すると鴨が一度に空に飛び立つ。そして彼らは中空にいる鴨を撃つのです。このようにして、

鴨は引力の力を受けないで空に飛び立つのですが、ところがその弾丸が鴨に当たると、何とその鴨は地上に一直線に落ちてくるのです。

引力が鴨に働いていなかったのではなく、引力が働いているにも関わらず、引力に勝る飛翔の力を彼らは持っている。引力は働いている。しかし、飛ぶことができるというのは、引力以上の力が働いているのだということがわかります。

ここにおいてパウロは、私たち人類に働いている力が「罪と死の原理」だ、法則だと言います。アダムが罪を犯し、そして人類に罪が入って来て、罪が入った時に死が入って来た。そしてこのようにして、罪と死の法則の中で人類が支配されるようになったことを勉強してきました。罪と死の力が全人類に働いている。ところが、パウロが発見したもう一つの力は「いのちの御霊の原理」です。いのちの御霊の原理を体験し、いのちの御霊の原理の中に生きる者は、罪と死の原理を乗り越えることができます。いのちの御霊の原理が罪と死の原理からあなたを解放したのだと言うのです。ちょうど、鳥が飛翔の力によって引力を乗り越えるように、私たちも御霊の力によって罪と死の原理を乗り越えるのです。

私たちは律法を完全に行う事ができませんでした。パウロのような優秀で熱心で真面目で努力を惜しまない人間でも、律法を行うことができなかつたのです。しかし、神はそれをしてくださった。どのようにしてくださったか。3節に「神はご自分の御子を、罪のために、罪深い肉と同じような形でお遣わしになり、肉において罪を処罰されたのです」と書いてあります。神の御子が人間となって、肉体をとりました。霊は死ぬことはありませんが、肉は死ぬことができます。霊は処罰することができませんが、肉は処罰することができます。私たちすべての者の罪をそのからだによって引き受け、そして罪がキリストにおいて処罰された。十字架にかけられて苦しめられたのです。

4節「それは、肉に従って歩まず、御霊に従って歩む私たちの中に、律法の要求が全うされるためなのです。」パウロは律法の要求を、努力して頑張っても満たす事ができなかった。一つの「むさぼってはならない」ということがひっかかって、どんなに努力してもこれを乗り越えることはできなかった。自分のみじめさ、弱さしか発見できませんでした。

ところが、御霊の中にあって生きると、何と彼はむさぼりから解放されてしまったのです。「それは、肉に従って歩まず、御霊に従って歩む私たちの中に、律法の要求が全うされるためなのです。」彼は自分にむさぼりがあるはいけない。むさぼってはいけない。むさぼってはいけない。むさぼってはいけないと四六時中自分に言い聞かせても、乗り越えることができなかつたのに、御霊の中にあつたら、もうむさぼることがなくなってしまったのだと言うのです。御霊によって生きると、律法の要求が全うされるのです。

誉れを受けたい。自分がほめられたい。認められたいというそういう動機で願ったり行ったりすることが、肉に従うこと、肉的なことです。肉に従うことは、肉的なこと、つまり自分がどうやったら認められるか、自分がどうやって栄光を受けるか、どうやって誉められるかということを絶えず考えるのです。

私は誉められることが悪いと言っているのではありません。誉められたら素直に「誉めてくれてありがとう。嬉しい」と素直にありがとうと言うのがいいですね。認められることはうれしいから、認められたら「ありがとう」と言えばいいです。

そういうことが問題なのではなく、絶えず動機として、認められることを考えてしまうのは、肉的なことです。

ピアノを弾く。神様の栄光を表し、人々にお仕えしてピアノを弾く。でもそのときに私が誉められたい。わがピアノを聞いて見よ、みたいに。歌うときも、神様をほめたたえ、力いっぱい自分の才能を生かして歌う。そして人々に喜んでいただく。自分が誉められたいと思ってすることが、肉的なこと、肉によって行うことですよね。誉められたい気持ちがあると、何か膠着したり、手が動かなくなったり、声が出なくなったりするものです。自由ではない。そういう思いから解放されたほうがよいパフォーマンスができます。

そういう肉から解放されて、ただ神様を誉めたたえる。ただ力いっぱい歌う、或いは力いっぱいピアノを弾く。

2 御霊に所属するとは

5節 御霊に従う者は御霊に属する事をひたすら考えます。だから御霊に従う人は、何かやらかそうとは考えないで、御霊に所属していたい、神様と一緒にいればそれでよいとひたすら考えているのです。夫婦だったらお互いに所属し、子どもだったら親に所属する。教会だったら教会に所属することをひたすら求めるように、御霊に所属することを求める。

何かをやるよりも、所属する事が大切です。イエス様は「わたしにつながっていなさい、わたしに所属していれば、たくさんの実を結ぶ事ができる」と言いましたね。所属する事が大事なのです。御霊に所属するということは、御霊のことをひたすら考えるのです。

小さな帆掛け舟、セイルボートというものがあります。大学生のとき、友達が自分の別荘に呼んでくれて、ノースカロライナの湖のそばで夏をすごすことができました。そこで、隣のエドワードとよく一緒にセイルボートに乗ったのです。セイルボートは4人ほど乗れる帆掛け舟ですが、宗教的に表現するなら、他力本願です。それに対してモーターボートは、モーターがついてパッと自力で走れるわけで、風が吹く必要もないし、こぐ必要もない。ボートが自力でどんどん走る。だから自力本願です。

セイルボートには、エンジンがついていません。その代わりに、帆がついています。そのため、セイルボートを漕ぐ人は、風のことを考えます。風に所属したい。風の向きはどうか、風の力はどうか、絶えず絶えず風のことを考えながら、セイルボートを操縦するわけです。

私は二夏これをやりましたが、なかなかマスターできず、マスターできないまま終わりました。モーターボートを操縦するのは割合簡単です。バックするのは、車と反対のバックの仕方をするのですが、割合簡単にマスターできました。しかしセイルボートは、難しかった。風というのは変わり易い。その風に所属するには、絶えず風に対して敏感でなければいけない。ちょっとした操作で、帆は風を受けて前に進む事ができる。上手な人がいると、風向きはしょっちゅう変わっているのに、ボートだけは真直ぐ進むのです。しかし私がやると、湖の真ん中でぐるぐる回るだけでどこにも行きません。真直ぐ行ったらと思ったら、途中でポンと逆方向になってしまいます。

私たちは他力本願なのです。自分の力ではなく、御霊の力で生きるのです。私たちは御霊に属する事をひたすら考えて、御霊がどのように吹き、どれほど強くふき、どういう方向に吹いているかを敏感にキャッチしながら動くのだということですね。

3 肉の思い、御霊の思い

肉の思いは死であり、御霊による思いはいのちと平安です。

パウロはピリピ人への手紙をローマの獄中から書きました。三年間そこにいたのですが、いつも喜んでいるんだよと言って、「何も思い煩わないで、あらゆるばあいに、感謝をもってささげる祈りと願いによって、あなたがたの願い事を神に知っていただきなさい。そうすれば、人のすべての考えにまさる神の平安が、あなたがたの心と思いをキリスト・イエスにあって守ってくれます。」ということばを書いたのです。

パウロが牢屋に三年間入れられていて、平気なんだということは、これはとても理解できません。理解できないから、「人知では測り知ることのできない神の平安」と言ったのですね。パウロはそのような平安を持っていました。肉の思いは死であり、御霊による思いはいのちと平安です。

というのは、肉の思いは神に対して反抗するものだからです。英語ではよく mutual exclusive ということばを使います。相互拒絶といいませんか。お互いに拒絶し合うという意味です。私が考える限りで一番近いのは反発ということばです。互いにはじき合うといいませんか。プラスとプラスを合わせようとするとお互いに拒絶し合いますね。水と油は同じ液体だからと水と油を缶に入れて混ぜて、「あなたたち平和に仲良く暮らなさい」と言って、「ああ、まざった、まざった」と言っても、しばらく経つと分離してしまいます。お互いに受入れない。相互に拒絶し合うのですね。

平和主義の人は、御霊と肉は仲良く愛し合えばいいのと思うのですが、仲良くできないのです。どちらの方が強いのかというと、御霊の方が強い。だから、御霊が肉を打ちのめして、打ち砕けばいいのですが、御霊は決してそのように自分の力を使わないのです。肉が「こうやるんだ」と言う時に、「わかったよ、やっごらん、あなたの思う通りにやりたい放題、思う存分やっごらん、私は邪魔をしないよ」と言って引込むのです。御霊は肉に決してチャレンジしません。肉でわれわれが活着している時は、「どうぞ、どうぞ、やりたいようにやっごらん。自信があるんだね。私の助けは必要ないんだね、私の導きも必要ない。自分で全部できるんだよね。だからやっごらん」と言って御霊は引込みます。

だから、肉が働いていると御霊はいらっしゃらないし、御霊が働いていると、肉的な要素はそこにはない。そのように御霊と肉は拒絶しているのです。肉にある者は神を喜ばせることができない。私たちの奉仕というものが肉によるのであれば、神を喜ばせる事はできません。ですから、ピアノでもギターでも歌でも、説教でも同じです。もし私が、「いい説教をしてやろう、私が誉められよう」と思って説教をする。まあ、私たちは誉められるのが好きです。皆さん遠慮なく誉めてください。私は誉められるのが大好きですから。

でも、「自分が誉められたい、自分は一人前の説教者だ」という動機でやっているなら、その説教は神を喜ばせることはできません。それがどんなに聖書的であれ、どんなにパワフルであれ、どんなに上手に話し、人々が感動したとしても、神は喜ばない。自分の栄光を求めているだけです。肉にあるものは神を喜ばせる事はできないのです。

霊によって働くということは、完璧かということ、そうではありません。御霊によってピアノを弾いたらミスタッチは絶対起こらないかということ、そんなことはないし、間違ってギターの弦を触ってしまうし、私のように頻りにことばを間違えたり、情報を間違ったりしてしまうのです。しかし、御霊でやっている時、神様から見れば、それは完璧な奉仕なのです。神様は人間的な失敗や過ちやミスというものを大まかに見て下さるので、私たちが神の栄光を現わしたいか、神様を誉めたたいか、神様に感謝しているか、私たちが自意識から解放されて自由になっているかということが、神様にとっては重要なのです。だから御霊によって奉仕するなら、神を喜ばせる事ができます。

4 御霊はからだにエネルギーを満たす

9節 けれども、もし神の御霊があなたがたのうちに住んでおられるなら、あなたがたは肉の中にはなく、御霊の中にいるのです。(クリスチャンは御霊を持っているから、御霊の中にいます)。キリストの御霊を持たない人は、キリストのものではありません。もしキリストがあなたがたのうちに住んでおられるなら、からだは罪のゆえに死んでいても、霊が、義のゆえに生きています。もしイエスを死者の中からよみがえらせた方の御霊が、あなたがたのうちに住んでおられるなら、キリスト・イエスを死者の中からよみがえらせた方は、あなたがたのうちに住んでおられる御霊によって、あなたがたの死ぬべきからだをも生かして下さるのです。

御霊は私たちのからだをエナジャイズ(力で満た)して下さるということです。

御霊とからだの関係です。御霊は私たちの霊(spirit)を元気にするだけではありません。私たちのたましい(soul)を元気にするだけではありません。私たちのからだを活性化してくれるのです。

英語では energizer アメリカでは電池の会社でエナジャイザーというブランド品があります。なかなか印象的な名前、エネルギー、活力を与えるという意味です。

最近、電話があつて、無料で警報器をお付けしますと言うのです。無料なら付けていただくということで、4階に警報器を二つ付けていただきました。「これ十年持ちますからね。去年までは5年くらいだったけど」と言うので、「警報器が改良されたんですか？」と聞きますと、「そうじゃないんです。電池が改良されたんです。今までののは5年しか持たない。でもこの電池十年もちます。もう一つ必要だと思いますが、お店に行くと五年ものと十年ものがあるとありますので、気をつけて、十年ものを選んでくださいね」と言いました。

同じサイズの電池ですが、今電池がものすごい勢いで改良されています。十年前に私はある記事を読みました。それは電池をつくる会社が自動車の会社を買収するという面白い記事でした。電池をつくる事は大切だ。電池によって何でもかんでもまかなえるようになるという極端な記事だったのです。

そういえば、今、電池自動車というガソリンなしに走る自動車が造られていますよね。ハイブリッドというのは、ガソリンを使って走り出し、スピードが出てくると、今度は電気の力で高速道路も走って行けるものです。しかし、もうあと十年もすれば、多くの人が言ってますけれど、ガソリンは全く必要なくなります。電池だけで動く自動車ができる。それほど今、電池の改良、開発にもものすごい力が注がれて、エネルギーの世界がどんどん変わっていくというのです。以前はパソコンを使っていて、電源を切ってしまうと三十分しかもたなかったのに、今は二時間もつようになった。一度充電すると二時間持つ。あるパソコンは八時間もつのです。ですから、充電したパソコンを抱えて、公園かどこかでパソコンが八時間動くのだ。電池がパソコンにエネルギーを与えるのですが。

私たちは御霊をもっています。御霊はそのエナジIZERのようにして、私たちの死ぬべきからだですら、エネルギーで満たすというのです。死ぬべき私たちのからだのデスティニー、運命は、死です。十三歳くらいの子どもはどんどん成長していますが、パラドクスがあって、どんどん大きく強く成長しているにも関わらず、何とその分だけ、どんどん死に近づいているのです。不思議ですけど。なぜなら、死のからだ、死ぬべき体ですから。

ところが御霊によって、死んでいくべきからだが生かされるのです。ダビデも、イザヤも知っていました。「主はあなたの一生を良いもので満たされる。あなたの若さは、わしのように、新しくなる。」(詩 103 : 5)「しかし、主を待ち望む者は新しく力を得、鷲のように翼をかって上ることができる。走ってもたゆまず、歩いても疲れぬ。」(イザヤ 40 : 31)

鷲は自分の翼の力で世界を舞うのではなく、風をキャッチして飛んでいるのです。風というのは聖霊の象徴です。風の力で天に上ることができる。それと同じように、主を待ち望む者は新しく力を得、風という力で、鷲のように翼をかって天に昇ることができる。走ってもたゆまず、歩いても疲れぬと教えられていますけれど、それは御霊が私たちのからだに与えるこの活力のことなのです。御霊は、活力を与えます。

5 御霊に導かれる人

12節 ですから、兄弟たち。私たちは、肉に従って歩む責任を、肉に対して負ってはいません。もし肉に従って生きるなら、あなたがたは死ぬのです。しかし、もし御霊によって、からだの行ないを殺すなら、あなたがたは生きるのです。神の御霊に導かれる人は、だれでも神の子どもです。

神の子は御霊に導かれるのです。

6 子としてくださる御霊

15節 あなたがたは、人を再び恐怖に陥れるような、奴隷の霊を受けたのではなく、子としてくださる御霊を受けたのです。私たちは御霊によって、「アバ、父。」と呼びます。

子としてくださる、という英語のことばは *adaption* と言います。

アメリカと日本の違いは色々ありますが、その一つは養子に対する感覚が全く違うことです。日本人は自分の遺伝子を持った子どもが欲しいと強く願います。子どもがなかなか生まれぬ、だからと言って日本では養子をもらおうとはなかなか思わない。それがいいとか、悪いとかではなく、ただ違うのです。でもアメリカ人は、そういうことは全く意に介しません。子どもができない、でも子どもが欲しいと、養子をもらうのです。それがごく普通のアメリカのパターンです。

私はアメリカで友達から、「日本人の赤ちゃんがもらえないかな」、と何回も聞かれました。日本の赤ちゃんが欲しい。

アメリカでは赤ちゃんをもらうのに七年間くらい待たなければなりません。赤ちゃんが欲しいのです。七～八歳の子ならば孤児院にいますのですが、赤ちゃんが欲しい。なかなか赤ちゃんの番が回ってこない。一番もらいにくいのは白人の赤ちゃん、その次は黄色人種、それから黒人の赤ちゃん。白人のカップルが黒人の赤ちゃんをもっていたら、それは間違いなく養子だとわかります。

私たちの教会を助けてくれたバプテスタの宣教師チャールズさんは、子どもが三人いるのに、また二人アダプトしたのです。一人は黒人の男の子、もう一人は韓国人の男の子でした。そうやってアメリカ人は、黒人の子であろうと、韓国人の子であろうと、養子が欲しいと思えば平気でアダプトします。

イエヌン教会はこのような未婚の母を暫くの間受入れるということをしていました。中学生が妊娠してしまうことさえ起こるのです。妊娠する年齢が低くなっているのだそうです。韓国の社会では、妊娠してしまうと、家からシャットアウトされてしまいます。親が恥だということで、家に来ないでくれと言われる。そのために教会でビルを購入し、未婚の妊婦さんに住んでもらう。そこで子どもを産むわけですが、私が行ったときには三十五人くらいのお母さんがいて、その日は洗礼式があり、七名くらいのお母さんたちが洗礼を受けていました。

「韓国というのは困ったもので、なかなか養子をもたらしてくれないのですよ。ここにいる子どものほとんどはアメリカ人が養子にするのです」と説明されました。先生ご自身は男の子が一人いるのですが、もう一人男の子の養子ももらって育てているのです。でも韓国人の意識は養子ではだめだ、自分の子じゃないとだめだということで、子どもが欲しい人たちももらわないというお話しをしていました。

でも、アメリカではもう欲しくてしょうがないのですね。黄色人種われわれはモンゴロイド、白人はホワイト、黒人はニグロイドと言いますが、モンゴロイドの赤ちゃんを彼らは喜んで養子にします。意識の違いですね。

両親から生まれた方が幸福か、養子にした方が幸福か。どちらの方が幸福でしょうか。まちまちあると思いますが、「おめでとう」、「何が?」、「妊娠したでしょう」、「ああ、これはミスタイク。欲しくないんですよ」。そういうことをアメリカ人は平気で言います。欲しくないけど、妊娠したから産みましょう。

ところが、養子ももらう人達は、欲しくて、何年間も待って、赤ちゃんが与えられたらもう愛情を注いで育てるんだと、一生懸命です。どちらが幸福か。もうどっちがいいかわかりません。

私たちは神に属する者ではなかったのに、神の子となった。養子となった。子としてくださる御霊が、私たちを子としてくださって、その御霊が神に向かって、「アバ、父よ」、と呼び始める。「アバ、父」「アバ、父」と呼ぶのです。

日本ではパパと呼ぶのが一般的でしょう。アメリカでは多くの場合、おじいちゃんと呼ぶ時にパパと呼びます。しかし、ユダヤ人なんかは、お父さんのことをよくパパと呼びます、日本で聞く「パパ」と、ユダヤ人たちが発音する「パバ」というのは随分違います。「パアパア」と感情をこめて呼ぶ呼び方が強烈な印象で私の耳にこだましています。

ヘブル語では「アバ」と呼ぶわけですが、この天地宇宙をつくった方が私たちの父で、私たちはその方を「パアパア」、「ダディ」と呼ぶ。私たちは養子縁組されたのです。神様は、欲しくて、欲しくて、たまらなくて、私たちを子としてくださったのです。

7 奴隷の霊ではなくて

ここに「人を再び恐怖に陥れるような奴隷の霊を受けたのではなく」と書いてあります。今までは奴隷の霊を持っていたのです。でも、今は子としてくださる御霊を受けた。

私たちは奴隷というものを考えることはありません。奴隷制は日本になかったし、今もないから、日本には奴隷と呼ばれる人は一人もいないのです。だから奴隷ということばに対する意識は我々にはありません。奴隷ということばを考えない。考える人はいない。現実感がありません。

ところが、ユダヤ人たちは四〇〇年間、奴隷であった。そして北イスラエルがアッシリヤに連れて行かれた時、再度奴隷とされ、南ユダは男たちが奴隷のようにしてバビロニアに連れていかれたのです。彼らの歴史の中には奴隷ということばがあって、奴隷ということに非常に自覚しています。

イエス様の時代は寝そべって、ひじをついて食事をしました。右手でパンを手にとって、ペースト状のものをすくって、二時間、三時間かけて食事をしたのです。どうしてそんなことをするのでしょうか。自分たちは奴隷ではないから。奴隷は食事をするのに時間をかけないけれど、私たちは奴隷じゃないから時間をかけるのだと言ってそうするのです。

聖書のお話ですが、イスラエルの民はエジプトで奴隷であったけれど、モーセによって解放されて、荒野を歩いてカデシュバルネアにきました。カデシュバルネアはイスラエルの南の門のような所で、そこから北上すればカナンの地に入れるという、これは決定的な時が来たのです。民数記の13～14章です。恐らく二年くらい彼らは荒野に生活して、この大切な時を迎えて、今カナンの地に入ろうとしている。神様が約束して与えるとされた地、乳と蜜の流れる豊かな地を目の前にしました。

そこでモーセはその地を探る為に十二人の斥候を送ったのです。

「モーセは彼らを、カナンの地を探りにやったときに、言った。『あちらに上って行ってネゲブにはいり、山地に行って、その地がどんなであるか、そこに住んでいる民が強いかわいいか、あるいは少ないか多いかを調べなさい。また彼らが住んでいる土地はどうか、それが良いか悪いかわいいか。彼らが住んでいる町々はどうか、それらは宿営かそれとも城壁の町か。土地はどうか、それは肥えているか、やせているか。そこには木があるか、ないかを調べなさい。あなたがたは勇気を出し、その地のくだものを取って来なさい。』その季節は初ぶどうの熟すころであった。(民数記13：17～20)

イスラエル政府はベドウィンの人にアパートを提供したのですが、遊牧民である彼らはテント生活の方がよいということで、テントにもどってしまいました。彼らが住んでいるのは、そういうテントの村なのか、或いは町か、宿営か、城壁のある町か。土地はどうか、そしてスパイたちは出ていった。

23節には、エシュコルの谷という所で、ぶどうが一房ついた枝を切り取って、二人で棒で担いだと書いてありますから、かなり巨大な、日本の巨砲の何倍もあるぶどうだったようです。

しばらくの間イスラエルは砂漠化が進んでいましたが、今日は緑地運動が起こって、どんどん植林をしています。不思議ですね。砂漠化するプロセスは、雨が降らないから砂漠化する。砂漠化するから、雨が降らない。緑が豊かになると雨が降るそうですね。ですから、植木を植えることによって、何とイスラエルに雨が帰って来た。

しかし、モーセの時代には非常に美しい国土で、雨が豊かに降ったと報告されています。そういうわけで、巨大なぶどうが取れた。ザクロやいちじくもあったといひます。彼らが果物を見せてモーセに言った。「私たちは、あなたがお遣わしになった地に行きました。そこにはまことに乳と蜜が流れています。そしてこれがそのくだものです。しかし、その地に住む民は力強く、その町々は城壁を持ち、非常に大きく、そのうえ、私たちはそこでアナクの子孫を見ました。(アナクと言うのは二メートル以上もあるジャイアンツです。そこに住んでいたのです。)ネゲブの地方にはアマレク人が住み、山地にはヘテ人、エブス人、エモリ人が住んでおり、海岸とヨルダンの川岸にはカナン人が住んでいます。」

色々な人々が密集していました。うちのめされるような雰囲気、スパイの一人であったカレブが立ちあがって、「私たちはぜひとも上って行って占領しようじゃないか、必ず、それができる」と叫んだ。ところが十人のスパイは、「攻め上ることはできない。あの民は私たちより強い。」と言う。彼らは探って来た土地について悪く言いふらして、私たちが行き巡った地は、その住民を食いつくす地だ。私たちがそこに入れば食いつくされてしまう。私たちがそこで見たのは背の高い人たちだった。そこで私たちはネフィリム、ネフィリムのアナク人を見た。私たちは自分がいなごのように見え、彼らも私たちがいなごのように見えただろう。と彼らはその晩、泣き明かしたと言うのです。

カレブは立ち上がって、「すばらしい地だ。もし私たちが主の御心にかなえば、主が主は私たちに土地を下さる。彼らは私たちの餌食になる。主にそむいてはならない。彼らの守りは彼らから取り去られているんだ。さあ、行こう」と言ったのですが、全会衆が何をしようとしたかという、カレブとヨシュアと、モーセを、石を投げて殺そうとしたのです。

結局、彼らはカナン之地に入って行かないで、そのまま荒野に引き返して、何とそれから三十八年間、合計四十年間、荒野でさまよって、そしてほとんどの者はその荒野で死んでしまった。

何が起こったかという、奴隷の霊が出て来てしまったのです。彼らは奴隷ではありません。身分としては、彼らは自由人です。エジプトから脱出して、もはやパロの力もエジプトの軍隊の力も及ばない。奴隷使いはもうそこにはいない。だから彼らは身分としては自由だったのですが、何と心は奴隷だったのです。奴隷の spirit を持っていた。

奴隷の spirit の第一番目の特徴は「できない」と言うことです。私達にはできない。カレブは出来ると言いました。「必ずできる。主が私達と共にいる。主が私たちの味方だ。彼らの守りはもう取り除かれている。神様の約束だから、絶対にこれはできる」と。でも、彼らは「できない、できない、できない、できない。」私たちは何かにつけて、「できません」と答える傾向があると思います。奴隷の spirit はできない、できない。できない。できない。

第二番目の特徴は、セルフイメージが非常に低いということです。それはもう仕方がないでしょうね。自分のからだは道具として使われてきたのですから、人権などないし。からだに役に立っている間だけは、生かしてもらえという感じです。働けるかどうか価値基準で、働けなければ意味のない存在。ですから、自分を価値ある存在と意識する事はありません。セルフイメージが低くなるのは仕方がないと思います。勉強した事もないし、教育を受けたこともないし、自分で判断したことも、決断したこともないし、自分で自分の未来を決める事はできないし、「高いセルフイメージを持ちなさい」と言っても、それは無理ですよ。ろくな者は着てないし、ろくなものは食べてないし、ろくな所に住んでないし、いつも下に見られて、あざけられているわけですから。彼らは「私たちは、自分がいなごのようにみえた」と言いました。鏡をのぞいたら、そこに人間の姿でなくて、いなごの姿があった。こんな私は小さい、小さい、いなごのような存在だ。時々私達も自分が小さい存在に見えることがあります。

ところがそれだけではなくて、「彼らが私達を見た時も、私達をいなごのように思っただろう」と言った。余計なお世話ですよ。彼らがどう思ったかわからないのに。彼らは、「おっかないイスラエルが来た」と思ったかもしれないのに。あのエジプトを脱出し、荒野を超えたパワフルな住民がやってきた。「こわいぜ」と思ったかもしれないのに。セルフイメージが低いと言うのは、彼らが私達を見た時に、きっと私達をいなごと思っただろうというのです。時々私達はそういう気分になります。人は私のことをどう思っているのか。自分はいなごのように思われているんじゃないか。

漫画のイグアナの娘を本の中で使ったことがあります。「私を映す鏡」という本です。一人のかわいい女性ですが、母親が「お前はイグアナだ」と思っていたので、鏡を見るとそこに見えるのは自分のかわいい顔でなくて、イグアナの顔が見えてしまう。セルフイメージが、自分はイグアナのように醜いのだと思っているので、醜い顔が映ってしまうのです。セルフイメージが低い。奴隷の特徴です。

第三番目の奴隷の特徴は、恐れです。怖い。彼らはジャイアンツだ。彼らは大勢だ。城壁に囲まれた町に住んでいる。私達は絶対彼らに勝つことはできない。

「神様の約束はどんなのだ。神様のことばはどんなのだ。神様の力をエジプトで見て、神の力によって紅海が真っ二つに分けられたではないか。あの神様の力はいったいどんなのだ。お前たちは神様の偉大なみわざを見ただろう」と言ったが、「私達にはできない。その地は悪い地だ。私達を飲み込んでしまう」と言う。

恐れがあると、どうしても敵が大きく見えます。敵が大きく見えると、自分がいなごのように見えるわけです。そういうわけで、奴隷の霊と恐れは非常に似ているということでしょう。神はあなたがたを再び恐怖に陥れる奴隷

の霊を与えたのではなく、子としてくださる御霊を与えたのだ。奴隷の霊ではないのだ。ところが奴隷の霊が働いてしまう。奴隷はいつ鞭打たれるかわからないので、いつもびくびくしています。せっかく荒野を渡って約束の地の入口まで行ったのに、いざとなったときに奴隷の霊が現われてしまいました。

彼らに必要なのは、唯一、勇気だったのです。勇気だけ。あとは全部もっていた。神の力はあるし、神の約束はあるし、偉大なモーセはいたし、そしてヨシュアとカレブというリーダーたちはいたし、もう神様が味方で、絶対に勝つことができたのですが、たった一つ欠けていたのが勇気だったのです。今坂武兄弟がビジネスを長い間されていて、「ビジネスに必要なのは勇気です」とよくおっしゃっていたのを思い出します。よくわからないですね。どうしてビジネスに勇気が必要なのか。

昨日は井村兄弟姉妹を小田原に訪問してきました。

日当たりのよいきれいなアパートにお住まいです。今日は町田の礼拝に出ていらっしゃいましたが、「どのくらい時間がかかるのですか」と聞いたら、「まずこのアパートからバスの停留所まで歩いて20分。バスに乗って小田急線に行って、小田急線の小田原駅から町田まで行って、そして教会に歩くのです」と言うことです。小田原には十二の教会がある。あの教会はどうで、この教会はどうだと割合よく知っている。この前、朝はお友達の教会に行って、午後世田谷の教会に来ていました。お友達の教会が近くにあるのに、町田までわざわざ来てくれるのか。来週はこちらの教会に来ると言う。よく来て下さいます。

この兄弟が大学を卒業してから、松下電器にお勤めになった。営業をやっていたのですが、彼の営業はお店に行ってマネージャーとお話するのではなく、本社に行ったのです。本社に行って、家電を説明して、教えに行ったのです。「今日のコジマ電気や山田電機は小さい、小さい会社だったのですよ。一番面白いのは玩具の会社、任天堂なんて本当に小さな会社だったのですよ」とおっしゃいました。任天堂は数年前までアメリカのシアトル・マリナーズを持っていた。一郎がどうしてアメリカに行ったのかというと任天堂の社長の助けがあったのです。アメリカ人も少し驚いた。任天堂がベースボールチームの持ち主だって。井村兄弟「小さい会社だったんですよ。あの任天堂は。ヤマダ電機や任天堂には、あの頃から特徴がありましてね。彼らは失敗を恐れないんです。『そんなこと無理だよ。できないよ。そんなこと失敗するよ、と大恥をかくよ』とみんなに言われたのに、彼らはそれを意に介しないで新しいことにどんどんチャレンジしていたのです。そういう会社だったんですよ」と言うお話しでした。「へー」と思いましたが、

これで、「ビジネスには勇気が必要だ」ということが少しわかりました。任天堂には勇気があった。失敗するかもしれない。つまりくかもしれない。大恥をかくかもしれない。でも新しい誰もやってないことにチャレンジしていったのです。なるほど、信仰だけではない。ありとあらゆることに、私たちは勇気を持つ必要があるようです。男性の皆さん、勇気をもって女性にプロポーズして欲しい。女性の皆さんは勇気をもって男性をひっかけて欲しい。勇気が必要ですね。

そういうわけで、私たちはいろいろなことで勇気が必要だと思いますが、神様は奴隷の霊ではなく、私たちに子としてくださる御霊を与えてくださいました。恐れを抱かせる霊とは「さよなら」だよ。今やあなたがたは子として下さる御霊をもって、神様を「パパ～、お父さん」と呼ぶことができるのです。

愛する天のお父様、感謝をいたします。あなたは私たちを救ってくださっただけではなくて、私たちのからだに御霊を注ぎ入れてくださいました。この御霊が私たちが神の子であることを証明してくれる。この御霊が私たちの霊と一緒に、全知全能の神を父と呼ぶのです。この御霊によって、私たちは肉の世界から解放されて、霊の世界、いのちの御霊の法則の中に生きて、死の法則を乗り越えることができることを感謝します。イエス様のお名前によってお祈りいたします。アーメン